

書

評

『どんぐりの雨』—ウスリータイガの自然を守る—

ミハイル・ディメノーク著 橋本 ゆう子・菊間 満訳
北海道大学図書刊行会 定価1854円 248頁

高井 征毅 (森林労連)



25年間の林業技師の洞察力が描き出す貴重な自然教育書

本書は、訳者（菊間＝山形大学農学部教授）が1992年に韓国の財閥企業「現代グルー

プ」とロシアとの合弁企業によるロシア沿海地方での森林伐採問題に関する日本ユーラシア協会の調査に参加したことに始まる。

著者ミハイル・ディメノーク氏は、ロシア沿海地方に生まれ育った「生粋のウスリータイガ人」であるという。ハバロフスク林業専門学校、ウスリー農業大学を卒業後、レスホーズ（営林署）に勤め1989年に地元の営林署長を最後に退職している。その後、年金生活者となったが1991年モスクワで作家学校に学び、在職中からの執筆活動に加えて『限りなき世界への窓』（90年）、『どんぐりの雨』（91年）、『ウスリートラの小道』（92年）、『ヴィクトリア湾の近くで』——ノンフィクション小説（93年）と、自費出版をふくめて精力的に取り組んでいる。

訳者（菊間）は、94年10月に著者をアヌーチナ村に訪ね、著者の守り育てたチョウセンゴヨウなどの森林を見学し共に語り合ったという。

本書は、巻頭に日本ユーラシア協会鶴岡支部等が1995年に著者を招き同市で行った講演録を収録し、本書『どんぐりの雨』の舞台であるウスリータイガの歴史と現状を紹介。著者自身の作品解説ともなっており、大変参考になる。さらに、付録としてチョウセンニンジンめぐるロシアの現状を批判する新聞記事「生ける金の価値」も同様である。あわせて、巻末の訳者（菊間）自身の「解説」は、本書の解説にとどまらず、ロシアとくに、

沿海地方とりわけウスリータイガの現状、開発の歴史、わが国との歴史のかかわりを簡潔に紹介されていることは、旧ソ連時代はいうにおよばず現状のロシア情報になじみが薄いわれわれには適切な解説となっている。

さて、本書は著者自身の体験を中心とした実話にもとづく小説である。訳者（菊間）によれば「今日おそらく世界史的な意義を持つ貴重な財産である」ウスリータイガの美しい豊かな自然が、著者25年余の同地方での営林署勤務のキャリアをもつ林業技士の洞察力を持って描き出されている。

4話のいずれも小説として描かれているが、ウスリータイガの自然界での役割、位置づけ、森林と人間、すべての生きもの達との結びつきなど、今日の日本では最早描かれなくなった貴重な生きた自然教育書となっていることに異論は無いものと思われる。

とくに、同地方が日本の北海道、東北地方の自然環境と類似していること。あわせて、同地方からの木材輸入量もわが国内では低い位置ではないこと。そして、何よりも著者が最も心を痛め、誰よりも訴えたいことは、森林面積1,200万ヘクタール、チョウセンゴヨウなど森林蓄積177,000万 m^3 （日本の国有林751万 m^3 、82,400万 m^3 ）、5,500の動植物数が確認されているウスリータイガの将来がロシア社会の現状では危ういことを世界に向かって叫んでいることである。

わが国をはじめ、地球的規模を持つ熱帯雨林などの現状と重ねあわせ見るとき、人類史的視点での処方箋が今日程重要な意味を持っている時代はないであろう。